

野々丘

第31号  
2010・6・13発行  
金光教学研究所

## 憧れを知る者

所長 竹部 弘

中学何年の時であったか、冬休みに初夢の絵を  
 書く宿題が出された。年が明けて、初夢を見な  
 かったという理由で提出しない者が何人かいた。  
 その時、美術の先生(五十才前後の男性教師)は  
 「夢は、現実でないから夢なんです」と言った。

この言葉は、直接には絵を描かなかつた理由を  
 覆すものである。だが、そのみならず、もつと  
 広く人生への態度から出てくるもののように思え  
 て、前後の状況は忘れても、この一言だけは心に  
 残っている。言ってみれば、寝て見るだけが夢で  
 はない、醒めたら消えるのが夢なのではない。現  
 実でないことよって否定されるのではなく、現実  
 でないからこそ夢であるという、遠くを見据える  
 ような響きが、余韻をなす。

\*

以前、立岩真也という社会学者の本を読ん  
 だ。この人は学者であると共に障害者支援で  
 実践的活動にも関わっている人のようであるが、

ある会議の席で、哲学・倫理学をやる人は、きち  
 んと哲学・倫理学で詰めるべきことを考えてい  
 て欲しいと発言していた。哲学・倫理学の議論  
 は、現実的に即効性はなく、間に合わないこと  
 が多いかもしれない。しかし、真に考えるべき  
 ことが考えられていなければならないというこ  
 とを、実践に立つ人が求めているという点が重  
 要であると思う。なかなか現実には追いつけず  
 有効ではないとしても、基本的に考えるべきこ  
 と、原理的思考がどこかでなされていなければ、  
 人間にとって危いことになりかねないという声  
 として、印象深い。

\*

他教団の教学者との交流の中で、現代社会の  
 問題、脳死・臓器移植や再生医療の是非などに  
 ついて見聞きし、考えようとする、両極に引  
 き裂かれたような思いにならされる。

人は、自分の命はもちろん、親しい大切な存  
 在についても、一日でも長く、一分一秒でも長  
 く生きていて欲しいと思う。それは偽りなき心  
 情である。そしてその思いを、親疎の別なく、全  
 ての人にに向けて注いで下さるのが神であろう。  
 しかし同時に、神の眼から見れば、百歳で大往  
 生を遂げた人も、生まれて一日しか生きられな  
 かった赤ん坊も、同様に尊い生涯であると抱き  
 とめて下さるに違いないと思う。そのように

目の前の現実を無視せずに、しかし同時に絶対  
 的な尺度を感じながら、あるいは絶対的な眼に  
 晒されながらの探究であることを忘れてはなら  
 ない。

\*

「現実」に對置されるものとして「理想」「夢」  
 「虚構」を挙げ、それらが心性の基調となった時  
 期によって、戦後日本における人間や世界の見  
 方・感じ方の変化を分析した研究がある(見田宗  
 介『社会学入門』)。それによれば、「理想」は現  
 実化(実現)されることを求めるが、「虚構」に  
 向かう精神は現実を愛さないという。その中で  
 「夢」は両義的であるように思う。「夢を持って」と  
 言われることもあれば、「いつまで見果てぬ夢を」と  
 揶揄されることもある。

現実を軽んじずに、しかも現実に終わらぬもの  
 を求めるには、おそらく幾つもの道がある。目の  
 前の現実と永遠の真実の間、慎ましい情感と強靱  
 な論理の間、容易ならぬ壁と深い励ましの中に  
 あって、その間に引き裂かれつつ、しかし再び結  
 び合わされる道を求めること。そのためにはどの  
 ような苦勞も悔いがないと思える教学の課題は、  
 そこにある筈である。



今春は二名の研究生を迎え、新しい研究年度を出発させることができた。以下、今年度の取り組みから、主なものを紹介したいと思います。

### 〈第九回教団付置研究所

#### 懇話会・年次大会〉

研究所は、他教団の教育学研究機関および研究者との交流を通じて、各教団における「教学」の現状を確認し、現代における課題意識、方法論の相互研鑽に努めることを目的として、教団付置研究所懇話会に参画しています。

(同会には現在、二十六の研究機関【会員十九、オブザーバー七】が加盟)

今年、本所が受け入れ団体となつて、十月二十九日に第九回教団付置研究所懇話会・年次大会が開催されます(於…金光北ウイングやつなみホール)。全体テーマは「現代性へ／からの問い」。大会では、現代の問題を前にし

## 研究所平成22年度の計画

た実践面と教義面に日程を分け、合計五研究所による研究発表と討議を行った後、全体討議を予定しています。これから開催に向けて、本部当局、関係各機関のご理解、ご協力も得つつ、職員一同力を合わせて取り組んで参ります。

### 〈第四十九回教学研究会〉

六月二十四、二十五日、金光北ウイングやつなみホールにて第四十九回教学研究会を開催します。発題・全体討議、研究発表等を行う予定です。

### 〈教学講演会〉

十二月十二日(布教功労者報徳祭時)に、紀要第五十号で発表した研究成果を題材とした教学講演会を開催します。

この他、引き続き研究に連動した資料の収集・管理を進めるとともに、各種研究講座、研究発表等の充実をはかり、一層、課題意識の先鋭化、方法の研鑽、研究領域の開拓に培って参りたいと考えています。

### 平成二十二年度研究題目

それぞれ次のように認定されました。

#### 〈第1部・教祖研究〉

加藤 実

『地誌』研究の視野から捉えた近世期大谷村「村民間の争論を手がかりにして」

小野家資料から、幕末、明治初頭の大谷村周辺地域の農民生活の実態を、「地誌」的な観点で浮かび上がらせる。

岩崎繁之

『お知らせ事覚帳』の表記分析

「覚帳」の加筆箇所に着目し、「覚帳」の筆記順から見えてくる「覚帳」成立のありようを窺っていく。

佐藤道文

「四二歳の大患における信仰の現出をめぐる一考察」香取繁石衛門の事蹟との比較を通して――

金光大神の四二歳大患の事蹟に着目し、従来、この事蹟が有していた、「生涯における転換点」といった位置づけをもたらず特異な意味を検討する。

#### 〈第2部・教義研究〉

大林浩治

『理解』の特質 ― 交感的な経験作用に注目して――

昨年度につづき、金光大神から発せられた言葉が、聞き手にどう受け入れられたか、それが「理解」として受けと

められる、聞き手側の要件を捉える。また、それにより、「理解」概念に結びつく本質的な特質を明らかにする。

高橋昌之

『理解』の言葉に見る『対話』の諸相

参拝者との応答関係において生み出されている金光大神の言葉に着目し、ここでの「対話」の諸相を捉えていく。特に、天地、神、環境との関わりなどを考慮に入れ、そこでの超越的な契機から、人間が創りあげられていく様相を見ていく。

#### 〈第3部・教団史研究〉

児山真生

「明治中期の地域社会における信仰展開の諸相」

地域社会の人々の状況、状態に深く関わる、信仰把握のあり方を、明治中期に注目して考察する。特に、地域社会の多種多様な信仰展開のあり方から、あらためて布教概念の再考を試みる。

#### 助 手

この他、各助手は、教祖の生活風俗とお知らせの関わりや、教祖広前に参る武士層の実態、また、遊廓などの地域特質と布教の実態、大正期の生活者の視線と教義像の関わりなど、それぞれのテーマにもとづいて、所員の指導のもとに研究を進めます。

# 「信心する」

## ということへの問い

囑託 河井信吉



紀要の発刊の辞にあるように、信心を抜きにして教学というものは成り立たない

のですから、研究所にお

ける過去の諸成果も現在の諸研究も、信心の自己吟味の営みであるということは言うまでもないこととすし、歴史の浅い本教教学においては多様な問いの可能性を開くべきであることも承知しているのですが、ここでは一つ気にかかっていることとして、「信心をするとはどういうことか」「信心を育てるとはどういうことか」という、「信心」を実践・営為として主題化する教学の展開ができないか、という問題提起をしておきたいと思えます。世俗化の中にあつて、無宗教という人が大半を占める現在です。そもそも宗教一般の世界にあつても、信心／信仰をするということは必ずしも自明なものでもありません。ですから、一般的な意味において、信心するということ自体が特殊な営みであるということになるでしょう。したがって、まずは、日本社会において「信心する」とはどう

いうことであつたのか、また、信心／信仰することとは、宗教一般、スピリチュアリティ一般の世界において、どのような特徴を持つ営みであつたのかについての展望を開く必要があるように思えます。それは同時に、宗教を持たずに生きること、さらに信心／信仰をしない宗教を生きること、についての内在的な理解を必要とするはずです。また、信心／信仰するという営為は、広く世間一般もしくは宗教一般において、何を契機として生まれ、どのように育まれ、伝えられるのか、それらを、それを可能にする環境や関係性を視野に入

# 言

# 提

れながら、具体的に問う必要があります。このように、「信心」とは何かを問う前提として、まずは宗教学や人類学、歴史学などといった一般諸学と接続する、以上のような問いがあるように思えます。

その上で展開していく教学の問いに期待したいのです。「信心」「神人」「信神」などと表記され、教祖以来、多様に語られ生きた、「本教」「この道」の、「信心」とは何なのか、それは、どのように生きること／生きられてきたものなのか、そしてまた、どのように伝えられ、育まれてきたものなのか、といった問いが、以上のような眺望をふまえつつ、原理的・教義的にはもちろんのこ

と、具体的・実践的にも究明されていく必要があるのではないかと、思われるのです。「信心せよ」と宣言され、「信心なければ世界が闇」「いのちよりも信心が大切」などと了解された、「信心」とは何なのか。それを生きることが可能にする条件とは何なのか。それはどのように生きられるもの／生きられるべきものなのか……。これらの闡明がとも重要であるように思われるのです。

もちろん、今日までの教学の諸成果は、ここで提起した問いに寄与するもので満ちていることはいうまでもありません。しかしながら、これは私的な印象にすぎないのかもしれませんが、「信心」そのものが語られる場合、多くの場合、抽象的であったり、断片的であつたりして、論文が結ぶ「信心」の像には、先人達の肉声ほどの迫力やリアリティには欠けるものがあつたように思われます。別言すれば、これまでの教学は、信心を教義的、思想的に問うという反省性のインパクトはあつても、「信心する」ということに向けられる実践的な反省性への喚起力は、十分ではなかつたのではないのでしょうか。ここをどう埋め、さらに展開していくのが、重要な課題となるような感じがするのです。字数の関係もあつて何故そう思うのかへの言及が不十分ではありますが、皆様と上記の課題関心を少しでもシェアできれば幸いに存じます。

(東京・中野教会)

## 平成二一年度研究報告座談会

〔参加者〕 岩崎繁之、高阪有人、堀貴秋、白石淳平、

早川貴子、高司智太郎（司会）

【司会】 研究報告座談会を始めます。まず、今回論文検討会に初めて参加した早川さんに、参加しての感想を聞いてみたいと思います。

【早川】 全体的な印象ですが、金光大神と参拝者をはじめ、村落社会における人間関係など、「関係」ということがキーワードのように感じました。たとえば、今回、私の報告は歴史事象や先行研究に対して一方的に私だけの関心で問おうとしていたのですが、それでも後になって、みなさんの研究も考えさせて頂く中で、単に自分の注目したい事柄が何かとの関わりの中で捉えられており、そこから本教の信心の核となるものをつかみ出そうということになっているんだと思えてきたのです。

【白石】 早川さんもうのように、その「関係」という面では、今年は、歴史認識や研究概念をめぐって、先行研究と関わらせた報告も多かったですね。

私も「関係」はこの度の研究報告のキーワードの一つだと思います。教学研究ですから、人間として生きて信心しているということから出発し、そこへ向けて問いが生まれてくる。改めて、先行研究の諸概念を検討するということは、いま生きている私

が、研究を通して生きてこられた執筆者の方たちと対話することなのかなと思います。

【高阪】 キーワードとして「関係」が挙がるとして、その内容において、分析対象として「関係」を指す場合と、「関係」を視点として対象や資料を捉えるというのでは、同じ「関係」という言葉であっても、意味合いが随分違うよね。今回、私自身、先行研究との関係から今後取り組むべき課題を考えてみたのですが、私の場合は、視点的なものに近いと思いますが、そこで問題になるのは、「関係から」何が究明されたかということ以上に、これまでの視点を組み入れ、「いま」というものとの関わりで、どのように表現するかという問題。いままさに吸っている空気をどう表現するかということが問われることになったと思います。

【司会】 その時、成果として先行研究を論じる場合と、先輩の研究者がどうしてそれを書いたのかを論じる場合と、大きく二つ考える道筋が浮かんでいることになりましたね。この選択は研究課題との関係で決まりますが、どちらにしても、先行研究があることによって、自らがいま問おうとしていることがはっきりする、これは間違いないことだと思います。

【岩崎】 これは私の感想だけど、今回、近世の大谷村に関わって加藤、白石報告があったけど、当時の大谷村の中がどうなっていたのか、金光大神の近所付き合いも含めて、改めて知らないことの、多いこ

と多いこと（笑）。縁戚関係や広前世話方などについては知っていても、その範囲から一歩外へ出たら、「こんな人が居たのか」と言うような。研究的視野という点でも非常に刺激を受けました。

【白石】 先行研究のように、実際に生きた研究者が残した成果があつて、それを受けた自分自身には、改めて、これからどう研究を生きるのかということに立つことの自覚が必要だと感じています。教学的な何かの引っかけかきを感じて自分の「いま」の立ち位置を、かつての研究者が身をもって問うていったという同じ面から、しつかり見つめていきたいと、話を聞きながら思います。

【堀】 先程から、先行研究のこと、また関係のことが出てきていますが、私は、今回、児山報告が、先行研究を教学研究草創期における本教信仰の独自性を究明する意識との関わりで批判的に整理しようとしたことは興味深く思いました。それは、いまの「宗教研対話」を要請する状況と呼応させつつも、当時の状況を考えればどうということかという、歴史的な現場感覚に迫るものだと思います。

【高阪】 教団史の分野では、このような現代的関心を組み込みつつ、歴史なら歴史の状況のこととして捉えるという、このような議論が生じているのではありません。つまり、これまでの議論が議論として成り立ち得てきた様相から捉えようとしている。このことは、いまを生きる自分たちの足場というものをどの

ように見出し得るかということでもあるけれども。

このことを譬えて言えば、一枚の絵があるとして、いま、その絵の額縁とか掛かっている壁とかに加えて、美術館なり、床の間なり、それをどの空間の中で見て、何を感じているのか。自らが位置する空間が問題になるというような、絵そのものよりも、それがある配置、環境が改めて気になるというような。

【白石】どこの視点で、これまでの認識を捉え直すかということと共に、もう一つそこに、なぜ問い直さなければならぬ「いま」なのかという問題が出てきますよね。付け加えて、それを問い直させてくれるものとしてのこれまでの蓄積の存在。このことをどのように積極的に考えることができるか。このことは認識のあり方ばかりではなく、資料についても言えることですが。

【岩崎】どの学問分野でも、何か新たな動きや新たなものを求めようとする時、決まって「自分たちは何なのか」という問い返しがおきている。このことは今の教学研究にも言えると思う。もちろん、道筋が簡単につくものではないけれど、ここ数年は、何かそのための格闘であるように思う。これはまだまだ続くだろうし、そう簡単には終われないだろうという気がしますね。

【司会】「関係」という言葉を手ばかりにしなから、話が進んでいきました。先行研究との関係、研究者の立ち位置など、どれもいまここで答えが出るもの

ではなく、今後、さらに研究の営みを通じて問い求めて行かねばならない問題も浮かんで参りました。

最後に、感想を申してみたいと思います。まず、話の中では、研究対象としての「関係」と、研究者の態度・方法上にあがる「関係」、この二つのバランスを考えさせられました。このことは、教学研究自身の、あるいは教学研究への見方の再確認に繋がっていくように思います。この点は「信仰を叙述すること、その課題性・可能性」というテーマを掲げる今年の教学研究会の中で話し合われることにならないでしょうか。さらにもう一つ。今年、紀要『金光教学』は五〇号を数えます。先行研究とはいえ、初期のものともなれば、半世紀以上の時間的隔たりがあります。このことから、今後、先行研究との関係を考える上では、個々の研究が持つ「歴史性」というものをどのように踏まえていくかが課題になってくるのではないのでしょうか。以上、思いつくままに申しましたが、これらの点々を問うことを通じて、先に出していた「信心」や「金光教」とするものの自明性を問い直しつつ、新たなものを見出していく、そのような意欲的なあり方を構想して行くことになればと思います。

以上をもちまして、研究報告座談会を終わります。ありがとうございます。

〈平成二二年度研究報告題目一覧〉

【第一部】▼「近世期大谷村の村民間の争論とその始末」加藤実(所員) ▼「『お知らせ事覚帳』原典表記に窺う神・人の関わり―墨跡をなぞることを視点に―」岩崎繁之(所員) ▼「金光大神の信心の始まりをめぐる一考察―視点の明確化に向けて―」佐藤道文(所員) ▼「宗門帳から窺う近世末期大谷村の諸相―大谷村宗門御改寺請名歳帳』データ化作業を通じて―」白石淳平(助手) ▼「幕末から明治初期にかけての旧藩士の信仰の様相―松浦一太夫久信を事例として―」早川貴子(助手)

【第二部】▼「言葉は、いかに「理解」となるのか?―『瞬間』と『気づき』をめぐる―」大林浩治(所員) ▼「言葉の生成と信心の関わり―金光大神と参拝者との関係から―」高橋昌之(所員) ▼「教義の解釈のあり方―『金光大神理解研究ノート』の検討―」高阪有人(所員)

【第三部】▼「『光時金神』考―『宝了院住職金光喜玉君の略歴』にみる他宗・村落社会との関係に注目して―」児山真生(所員) ▼「遊郭における『教会』存立のあり方と意味―大正末から昭和初期における二本木教会を事例に―」堀貴秋(助手) ▼「『どうすればいいのか』この問いの意味を求めて―『金光教徒』の「問答欄」に見る大正期の信心の特徴―」高司智太郎(助手)

## 思い出の一端

山田實雄 (元所員)



纏わるものである。

私の七年間の在職中、最も心に残っているのは、やはり、研究論文執筆に殊に年に一度の研究報告は、苦い思い出でもあり、且つ貴重な体験でもある。研究所専用の原稿用紙、二百五十文字の枠目を睨み、鉛筆を削りながら、書いては消し、消しては書きを繰り返す。まさに悪戦苦闘。収集資料を駆使し自論の展開へと仕上げていくその作業は、実に苦しいものであった。しかし、一旦書き挙げれば、わが子のように愛おしい心持ちで、先ずは大いに満足に浸ったものである。次は提出の為の「ガリ切り」作業。蠟引き原紙を版にあてがい、鉄筆で書きこむ。これは結構力が要り、指が痛い。が、締め切りに間に合わせようと、必死でガリガリと切り続けた。終えたときの爽快感は何とも言えない。

実はこの快感もほんの束の間。謄写版印刷の後には、厳しい試練が待ち構えている。それは承知しつつも、やはり思い

が形になって現れることは嬉しいものだった。

いよいよ出来たての我が報告書を抱え、全職員の机に配って回る。ここここに至ると、今度は論文の評価が気になる、一気に不安も広がる。論文の出来栄もさることながら、私の場合は文章の一字一句も気がかりで、校正の達人である先生の手により、朱色で書き込まれた我が報告書が、早い時には、配布後数時間に戻ってきたこともあった。情けない思いでその報告書を眺めたものだったが、このことで文字一つ、表現一つの重みを実感することになった。

研究報告の最終場面は、検討会という大試練の場。研究所の一年で一番晴々しくもあり、一番重々しいものでもある。じりじりと押し込まれ、ぐいぐいと捻じ込まれ、終には自身の信心姿勢まで問われる。これに応えんがため、自らの思いの丈を、時に叫び、時に開き直り、しかし結局は、己を見つめ直すに至る。このような論文検討会が、同時に人を育てる場でもあることは、間違いない。この場でお育てをいただいた者として、いつまでも厳しくも温かい検討の場が継続・展開されることを願い、思い出の一端としたい。

(岡山・新見教会)

## ご神縁

寺本 涼子 (元主事)



私は高校卒業後、金光教学院へ入学。一年間金光様のおひざもとで神様に心を向け、学院卒業

後は、金光教教学研究所の事務で御用。春にはさくらが咲き、事務室の前には池があり風情を感じる場所で御用をさせていただくことになり、私にとつてお道の御用のスタートは教学研究所でありました。

しかし、パソコン一つにしてもパソコンの立ち上げから教えてもらわなければならない様なことでした。郵便物、回覧物を各部所に届ける時などは、「届けに行つてきます」と事務室を一步出るとなかなか事務室へ戻つて来ない私でもありました。

各部所の先生が「おー涼ちゃん」といつでもどこでも声をかけて下さり、そこから話が始まり、時には金光大神の教えにもふれることができました。話が次から次へとふくらみ、午前中は話で御用が終わり」ということが多々ありました。そんな私でもありました

ので当時の事務の先生は、戻つて来ない私を内線で「中島さんそちらにいませんか?」と急ぎの用事の時は探さざるをえないようなことでした。

研究所では年に一度、研究所で御用されている先生方の家族を招待して感謝する「園遊会」という行事があります。粹なはからいだなあと思いました。先生方が日々研究ができた元気なのも家族の祈りがあつてのことだと、なかなか出会うことのない奥様たちとふれあつて感じさせて頂き、有意義な時間を持つことができました。会の諸準備から奥様たちとおしゃべりする中で、さりげない心配り、声かけをする姿に私の心が元気になったことを今でも覚えています。このことが在籍している教会で生かされていくように、なかなかできていない私でありますが、私の中の日々の祈りの一つとなっています。

研究所での御用は三年でありましたが、その中で出会った先生方、またその家族との「神縁」を改めて思い返してみますと、あの「園遊会」は私にとつては「縁遊会」だったのかもしれない。

(広島・安芸川尻教会)



# 読みの協働性

## —研究交流を願いとして—

大阪大学大学院博士課程の永岡崇(ながおかたかし)氏を招き、教祖論をめぐる、ゼミ(12月9日)を開きました。

永岡氏は同大学日本学研究室川村邦光教授の門下生であり、宗教学を専攻されている新進気鋭の研究者です。また同氏は、東アジア宗教文化学会に参加され、所長も参加していた天理大学おやさと研究所主催の宗教研究会「開祖論・教祖論の構築・脱構築」のメンバーでもあります。このようなご縁から、とりわけ助手をはじめとする同年代の若手研究者との刺激的な交流を願い、現在取り組んでいらっしゃる研究の立場から「教祖論」をめぐる発題をお願いしました。

### 永岡氏の発題

安丸良夫、島菌進、川村邦光、そして荒木美智雄ら、先人の教祖研究を思想として捉え、宗教研究の営みを文化的に記述していこうという試みを紹介されました。

その中で永岡氏は、従来、七〇年代、八〇年代の教祖研究は、イデオロギー性を持ったものとして批判されてきたが、これを継承して現代があり、その方法(技術的手続き)を見ていくことは、現代の研究の立ち位置を確認することにつながるのではないかと指摘されました。

さらに、信者は信者としての立場から教祖のテキストを読み込んでいき、教祖を求めていきませんが、研究者も教祖のテキストを読み込み、教祖像を作り上げていく、つまり、教祖研究もまた宗教運動の一つであるとして、テキストに対する読みの「協働性」「共同性」の可能性を語られました。

### 問題を際立たせて

永岡氏の発題の後、教祖研究の展望と可能性をめぐる懇談しました。参加者の感想を紹介します。

● 所外の研究者、そして信者らの教祖像をめぐる多様な受けとめ、そこから「読みの共同体」という新しい展開の可能性を探るといふ永岡氏の試みを伺い、教学研究者として、教祖のテキストの「読み」をしていた自分の立っている位置や、「読み」のあり方を、改めて見つめ直すきっかけを与えられた。  
● 人間は時代、社会、文化…様々な「文脈」(コンテキスト)が交差する中を生きていると思う。私た

ちが、日々の生活を送るといふことは、意識無意識にかかわらず、その様々に交錯する「文脈」を読んでいくことなのかもしれない。そのような認識を新たにしたい。

○ 信者であり、研究者である私たちにとって、今回の永岡氏のお話は刺激のあるものでした。教祖のテキスト(「覚書」「覚帳」)を「読む」こと、改めてその意義に思いを馳せる一日でした。

### 永岡氏の主要な論文の紹介

- 「安丸良夫と「民衆」の原像—『出口なお』について—」  
(『日本学報』25号、2006年)
- 「教祖の〈死〉の近代—中山みきの表象=祭祀をめぐる—」  
(『日本学報』26号、2007年)
- 「歴史の記述と憑依—飯降伊蔵の「おさしづ」と親神共同体をめぐる—」川村邦光編著『憑依の近代とポリティクス』  
(青弓社、2007年)
- 「天理教の戦争と「真情」のポリティクス—アジア・太平洋戦争期における「ひのきしん隊」の実践と信仰—」  
(『日本思想史研究会会報』27号、2010年)

# 問いを生きるということ

## —なかざと さとし 中里巧先生をお招きしての教義懇談会—

紀要第49号で特集「信心のいまと語り」を組みましたが、ここからの調査のあり方や、教学の課題としての問いの深まりを求めて、中里巧先生(東洋大学文学部哲学科教授、早稲田教会)をお招きし、教義懇談会(11月30日)を開きました。

### 中里先生の発題

#### いま、生きた研究を

#### 考えることについて

私たちは普段、それと気づかないとしても、いろいろなレベルの意識の重なりの中で生活しています。中里先生は、そのような人間の意識構造をどう捉えるのか、分かりやすくお話し下さいました。

例えば、先生が紹介して下さいたエピソードに、次のようなものがありました。

先生が教鞭を執っておられる大学で、学生たちに「あなたたちは死後、自分自身の墓を必要としますか」と尋ねると、彼らの大半は「必要としない」と答えるそうです。そこで今度は質問を変えて、「では君たちのご両親が亡くなったとき、君たちは墓に埋葬することはないのですか」と尋ねると、一転して大半の学生の答えが「両親の場合は墓に埋葬したい」となるということです。

この学生たちとのエピソードからは、彼らは、日常生活では葬送儀礼や霊魂の存在などにリアリティを感じないとしても、その深層意識においては、そうしたものに対して何らかの意味を認めるような、根源へのまなざしが窺われると

のことでした。

私たち自身の生活を振り返ってみても、普段は、様々な理論や知識、マスメディアからの情報、一般常識など、目に見えるレベルの世界に思いが向きがちです。しかし少し視点を変えれば、その世界を支えるものとして、深く広い、無意識の世界や、さらには古代にまで遡る意識の古層まで含み込んで考えることが出来るということです(中里先生は、このような構造全体を、「**有意味性体系**」という言葉で表現されました)。

先生によれば、日常性を支える世界観や価値観として、古層(日本人の場合では、自然との接触を通して神聖・崇高・生命等を感じるアニミズム的センスなど)が、実は重要な役割を果たしているといえます。このような古層にまで遡りつつ、普段はあまり意識されない感性を活性化させることを通じて、人間の日常性や、学問そのものにも豊かな意味が与えられる可能性が示されました。

### 発題を受けた後の懇談

中里先生による発題の後、参加者全員で懇談を行いました。その要点を紹介します。

#### 【調査について】

中里先生は、「有意味性体系」の理論を土台としながら、各地で調査（フィールドワーク）もされています。所内からは、具体的にどう取り組んでいるのかとの質問があり、そのことについてまず意見が交わされました。

例えば、先生はキルケゴールを研究される中で、キルケゴールが生活していた北欧の思想を、テキストの存在しない古代にまで遡って探るそうです。その為には、考古学的な資料も思想の対象となりますし、アイスランドのように昔からあまり環境変容のない場所に行って、その景色を一日眺めたり、スケッチすることもあるとのこと。これは、かつてその土地で生きた人々の感性を、身体的な感覚をもってイメージする有効な方法だということでした。

お話を伺いながら、教祖の「理解」を読むについても、教祖や参拝者の生きていた環境や、参拝者の職業、家族関係、地域の習俗をはじめとする諸要因を考慮しながら、「理解」のなされる場面を立体的にイメージする方途を、色々な場に赴きつつ体で感じ取っていく調査の可能性などが話し合われました。

## 【現場と教義の関わり】

さらに、中里先生が東京の山谷（日雇い労働者が多く住む町）での炊き出しボランティアに

参加することを通じて、イエスの語る話（貧しい人や食にまつわる奇蹟など）を読み直したり、ケアの原点を探ろうとされた体験談に触れながら、現場と教義との関わりについても議論されました。

その中で、信者の方との対話を試みることで、現代の人間の生きる実際と応答関係を持ちながら、どのように教祖時代のテキストを読むことが出来るのか。またそうした取り組みを通じて、日常の信心風景に教祖が現れることが、どう可能になるのか、といった課題を巡って話し合われました。

○

今後も、先生との交流を通じて、研究者個人の生きざまと学的営みとが一つになること（先生はこのことを「実存しつつ考える」と仰いました）を求めたいと思います。そして、今を生きる人の心に響くことを、教養する研究者の姿勢として大切にしていきたいと考えます。

（文責・高橋）

## 中里先生の著作『福祉人間学序説』（未知谷）の紹介



この本のはじめには、次のような一文があります。「例えば、大都会の片隅で、民家の自転車置き場の陰で段ボールやシートをかけて、人目を避けるかのようにして飢えながらうずくまっている初老の人を眼前にして、総括的一体系的知識は、いかなる解答を、与えるというのだろうか。」（4頁）

人間の暮らしに密着した風景からしか掬い取れない問題に、どう向き合うことが出来るのか。この問いが、「実存しつつ考える」ことを大切にされる先生の学問方法論において、主題化されているように感じられます。

### 新職員紹介

昨年9月10日付で本所書記に就任した山本司さん(香川・豊島教会)は、大学卒業後、学院に入学。そして学院卒業後に本部教庁布教部を経て、この度、事務室の御用にあたることになった。

二十年程、霊地に在住しているのでこの辺りの土地は熟知しているものの、幼い頃、研究所だけは、山の上にある古びた洋館で何かを研究していると聞き、何か怪しいものを研究しているのではなからうかと思いい近寄らなかつたそうだが、「これから研究所で御用するにあたり、



布教部で学んできた事を活かしつつ、一から学ぶつもりで様々な事を吸収したいと思う」と意気込みを語る。

### 研究生紹介

5月1日、本年度の研究生、野中正幸さん(福岡・北九州八幡教会)、齊藤隆三さん(福岡・西直方教会)が入所されました。9月30日までの5ヶ月間委嘱され、実習に取り組みます。「私は研究所と、このような出会い方をしています」という自己紹介です。

### 第三部 野中正幸

初日に行われた児山指導所員との懇談は、例えるなら、所外でモジモジしている私を所内へと引きずり込んでくれるものだった。幾度か話をさせて頂くうちに、あとで咀嚼したいと思い「終始ICレコーダーでも仕込もうか」という誘惑にかられた。だが、この場限りの重みを受け止めることこそ、今の私には大切だと思いついた。これから迷いの連続だろうが日々を大切に過ごしたい。

### 第二部 齊藤隆三

研究所の第一印象は、建物の周りが自然に囲まれており、良い環境だと感じた。今の私は未熟だが、これから天地を感じるような視野で物事を捉え、理解を深めていく体験をしたいと思っている。

私は、中山亀太郎師の「運命を愛し、運命を生かす」という言葉が好きだ。それ

は、自分の囚われを外して、大きな世界との出会いを促していると思うから。これからも研究所とのご縁に感謝しつつ、この状況を生かせるように自分を磨きたい。

### 人事異動

(平成21年6月1日〜平成22年5月31日)

(1) 職員(教団職員)

○所長竹部弘、6月30日付で任期満了、7月1日付で再任。

○教師山本司、9月10日付で書記に任命。

○主事佐藤剛志、9月30日付で辞任。

○教師早川貴子、10月1日付で助手に任命。

○助手佐藤道文、同高阪有人、11月1日付で所員に任命。

○書記山本司、11月7日付で主事に任命。

○所員高阪有人、3月31日付で辞任。

(2) 研究生

○研究生早川貴子、9月30日付で委嘱期間満了。

○教徒野中正幸、同齊藤隆三、5月1日付で研究生を委嘱。

(3) 研究員

○研究員水野照雄、11月30日付で委嘱期間満了。

○教師佐藤武志、信徒藤本拓也、12月1日付で研究員を委嘱。

(4) 評議員

○評議員岩本世輝雄、5月9日付で任期満了。

○教師松岡道雄、5月10日付で評議員に任命。

平成22年5月31日現在 本所職員16名

(所長1名、部長3名、幹事1名、所員2名、助手4名、事務長1名、主事4名)、研究生2名、嘱託9名、研究員6名、評議員5名

### おめでた

出産



所員高橋昌之・直子夫妻に3月6日三男弦人(げんと)ちゃん誕生。

### SAKAMICHI

今年も通信『聖ヶ丘』を無事に刊行させて頂くことができました。原稿を執筆して下さった方々には御礼申し上げます。今年のトピックスを一つ紹介します。今年度の営繕において、本所の下水道接続が実施されることになりました。それにもない、日常的に使用している便所が、水洗便所へと変わります。昭和五年一月に客殿として竣工してから八〇年近く使用した物もあり、本所設立以降は、五五年を超えて職員が使用させて頂きました。長年使用させて頂きましたことに御礼を申し上げると共に、新しいトイレも大切に使用したいと思います。

### 発行・印刷 金光教学研究研究所

岡山県浅口市金光町大谷一四四一之三  
電話 (〇八六五) 四二一三二一七  
FAX (〇八六五) 四二一三二一九